

## 4足のわらじを履く

宮城教育大学教職大学院には、小学校教諭でありながら、学生として研究を行っているお母さんがいます。教師と学生、そして妻として母親として、4足のわらじを履き、日々奮闘中の鈴木久美さんに、仕事と子育てを両立するためのヒントを教えてくださいました。



鈴木久美さん

## 子どもと過ごす愛しい時間

—お住まいは登米市。遠距離通学ですよ。

自宅から大学院まで高速道路を使って1時間半ほどかかります。「大変だね」とよく言われますが、実は通学時間は私にとって貴重なんですよ。たとえば勉強のことや仕事のこと、夕飯のこと、昨日は子どもをああ言って叱ったけれど、分かってくれたかなあと、運転しながら考えるんです。

それとわらじを履き替えると言いましょか、母親から学生へ切り替えるためのいい時間にもなっていますね。

—お子さんは今いくつですか？

高校1年生と小学校6年生の2人兄妹です。息子は仙台の高校に通学しているので、朝5時に起きてお弁当づくり(笑)。

—朝5時!? すいぶん早いですね!

夏休みがけっこう大変でした。息子はラグビー部に所属しているんですが、夏休み期間中の部活は朝6時スタート。でも6時に間に合う電車が地元では走っていないので、始発の出る小牛田駅まで送っていかねばなりません。小牛田までは車で30分。だから起床は朝4時でした(笑)。

—仕事と学業、そして子育て。何かとご苦労もおありかと思ます。

息子の送迎もそうですが、夫と私の交代制なのであまり苦労はありません。ただ、そういう協力体制がなかったら、こうして仕事を続けられなかったかと思ます。

私は夫とは想いを伝え合えないといけなくて考えてきました。我が家は毎日ニコニコ生活してきたわけではなく、特に若い頃はぶつかることが多くありました。ぶつかるといっても、言い合いになる訳ではなく、私の方が一方的に「何で」と責めてしまうだけ。男の人ってあまり言葉にせず、黙ってしまうことが多いですよ。それに救われることもあります。それではこちらが夫の気持ちに気付かずイライラするし、夫もストレスをためてしまう。家族のことは、誰かが我慢すればいいことではないはず。してあげているのに、「してくれない」ではなく、一緒に暮らしを作っていきたい。そのためには歩み寄りが絶対に必要です。だからこそ、想いは伝え合わなければいけないと、お互い意識するようになりました。そのおかげで、辛い局面を乗り越えた時、夫婦として、人間として強くなってきたように思ます。

あとは「息抜き・手抜き」。仕事と子育て両方完璧に!となれば、どちらか一方を選択しなければならない状況に陥ってしまいますから。

私の場合は夫婦で協力し合っただけではなく、地域のみなさんにも支えていただきました。保育園のお迎えに行ってもらったり、子どもたちを連れ出してもらったり。

私は秋田の生まれで、夫は塩竈。互いの実家が離れていてもここまでやってこられたのは地域のみなさんのおかげだと感謝しています。

—鈴木さんが秋田でご主人が塩竈。では、登米にお住まいになった理由は？

初任地が登米でした。保護者のみなさんをはじめ、本当に登米のみなさんにはよくしていただいたんです。それで登米が気に入って家を建てました(笑)。

登米はとても素晴らしい地域。いい保育園にも巡り合いました。子どもたちは土や水に触れ、散歩で木の実の種類を学び、歌をいっぱい歌わせてもらいましたね。

—これから現場復帰。ますますお忙しくなるとは思いますが不安はありませんか？

もちろん不安はあります。子どもたちの部活は朝早いから、早く起きてお弁当を作らなければならない、だからこれまで朝にやっていた仕事ができなくなってしまう、さあどうしよう…。こうして不安を言ってしまうばかりがありません。時間の使い方を今まで以上にうまくやりくりしないといけなくて思っています。

ただ、私の場合は子どもたちと関われる時間が残り少なくなってきました。同世代のお母さん方とお話すると、どうしても子育ての愚痴になりますが、先輩お母さんは「あともう少しだよ」「私は子育てが終わってしまっさみしいよ」とおっしゃるんですよ。だから今、このバタバタと過ごす時間が愛しい。

子どもが小さいうちは特に子育ての悩みは尽きません。うちもありました。このバケツに一体いつまでこの子のおむつが入っているんだろう、いつになったらおむつが取れるんだろうって。でも、子どもとハグしたり、ベタベタしたりする時間、子どもがストレートに愛情をぶつけてくる時間は、本当にあつという間に過ぎてしまいます。家庭にいるお母さんより、子どもと一緒にいられる時間は短いけれど、子どもの表情を見逃さないように、触れ合いを大事にしたいという気持ちがあれば、それは子どもにもちゃんと伝わるんじゃないかと信じてここまでやってきました。

—働くお母さん、働きたいお母さんに、先輩ママとしてメッセージありますか？

働くということは、子どもを介した友達だけでなく、仕事を通しての仲間もできますから、いろいろな出会いがあり、さまざまな視点から子どもや家族を見られるという良さがあります。

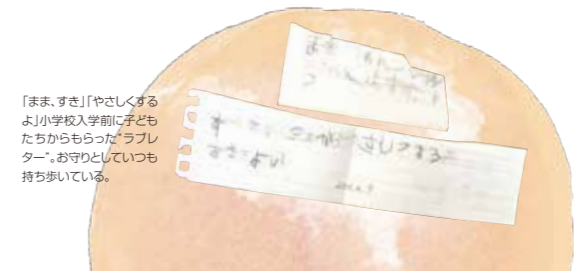
教職大学院には小学校教諭だけでなく、中学校、高校、特別支援の先生など、現職の先生方が14人います。同じ教育に携わっていても、立場も課題も研究内容もすべて異なります。だから自分にはない視点を常に与えていただいています。ネットワークが広がったことは大きな財産です。

それと私が子どもたちに一番願うのは、自立した大人になってほしいということ。自立とは、自分の頭で考え行動できる、そして困った時には周りの人たちに頭を下げて「助けてほしい」と口に出せる。相手の痛み気付いて、困っている人に手を差し伸べられる人間です。

子どもを保育園に預けていた時、3世代家族が多い環境ですから「子どもがかわいそうだね」と言われたり、お迎えが遅くなり、子どもが保育園で一人ぼつんと私を待っていたりという日もありました。それでもたくましく育ち、時々「保育園は楽しかったな」と話す子どもたちを見てると、仕事を続けてきてよかったなあと思ます。

先ほどお話ししたように、保育園のお迎えや外出など、私自身いろいろな人たちに頭を下げて子育てをしてきました。そうして働く姿を子どもたちに見せるのは決して悪いことではないと思んです。

日々、家族で支え合って作ってきた歴史。これが何よりも私の財産であり、家族の財産になってきたと思っています。これからもバタバタとしながら、そんな毎日を楽しんでいきたいと思ます。



「まま、すき」「やさしくするよ」小学校入学前に子どもたちからもらった「ラブレター」。お守りとしていつも持ち歩いている。